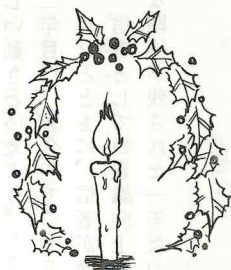


仙台司教区 教区事務所だより

— 待降節と降誕祭を迎えて —

クリスマスは信者よろこびの日

多くの人々のために祈ろう 救いのおめぐみ



(第 62 号)
昭和57年12月1日

教会は毎年、救い主イエズス・キリストのご誕生を盛大にお祝いする。私たちはできるだけ多くの人々、友人や知人と、クリスマスのごよろこびを共にしよう。その人々に救い主のおめぐみがおよぶように祈ろう。

クリスマスのごよろこびは、私たちが救われたことのごよろこびでもある。このよろこびはあまりに大きいので、救い主を長いあいだ待ちのぞんだ当時にない、私たちが心の準備の待降節を過ごすのである。

私たちが救われたよろこびはまた、私たちが信者であることのごよろこびにも通じる。そのよろこびを私たちはもう体験したのであるか。毎日の生活の中で、私が信者であるよろこびをどれほど感じているだろうか。

ことし聖人とされた日本ゆかりの聖マキシミリアノ・コルベ神父は、餓死刑で生命を絶たれたときも、おだやかなよろこびにみたさ

れていたといわれる。信者であること、そして救われたものであることのごよろこびである。しかしそれは、四十七年の生涯を信者として、司祭修道者として燃やしつづけた、救い主イエズス・キリストへの愛と、聖母マリアへのより頼みによってもたらされたものにほかならない。

聖コルベ神父にない、私たちは毎日熱心に祈り、心からの愛徳の業を惜しまない信仰生活に徹底しよう。そのとき私たちは信者であることのごよろこび、そして誇りと責任をおのずから感じる事ができるのである。

仙台教区に司祭召命の恵みを

12月5日 邦人司祭育成の日

この日に日本の全信者は、司祭職を目指す神学生のため、祈りと献金で物心両面の支援を行う。仙台教区ではいま、板垣 勤(花巻

教会)、川村英成(大湊教会)、佐藤修田町教会)の三神学生が、二、三年内の司祭叙階をひかえ東京カトリック神学院に在学している。すぐれた司祭の誕生は、教会の発展そのものだから、教区をあげて、なおいつそ神のお恵みを三人の神学生のため祈ろう。

さらに、この三人につづく神学生志願者の召命は、仙台教区にとって最も重大なことである。各小教区教会は邦人司祭育成の日を機会に、司祭召命の重大さを語り合い、仙台教区に司祭召命を祈ろう。6月号に発表した、「仙台教区に司祭召命を願う祈り」を用いてほしい。優秀な青年や学生の中から、司祭志願を表明する者が生まれるまで、教区の気運を盛り上げることが教区の優先事である。

司教日程 (11月11日現在)

12月6日 教区司祭団月例会(仙台)

10日 あけの星婦人会懇談会(仙台)

13日 教区司祭団役員会(仙台)

25日 深夜ミサ(元寺小路教会)

1月1日 新年の平和ミサ(元寺小路教会)

4日 聖ドミニコ会叙階式(東京)

9日 聖ライムンド(修道名)のお祝い、新年会(元寺小路教会)

'82年間目標

家庭から社会に
キリストの平和を
(仙台教区)



一 関
に 新らしい幼稚園舎完成
気仙沼

一 地域の幼児教育に新戦力一

仙台教区ではこのほど二つの幼稚園園舎の新築工事が完成。それぞれ盛大に祝別、落成を祝ったが、地域の幼児教育にとつて新しい戦力となることが期待される。

岩手県一関教会の愛心幼稚園(園長・鷹野達衛神父)は、10月31日午後2時から佐藤千敬

一 一九八二年を顧みて一

司教目標 “キリストの平和” が中心

この一年、仙台教区は神の国建設のためどんな活動をしただろうか。

これまで四旬節教書だったものが年頭司教書簡になり、今後三年間の司教目標として、「家庭から社会にキリストの平和を」が示された。一年目の今年はキリストの平和とはなにかを考え、それを家庭の中に実現することとした。年二回ひらかれる教区司教評議会は、司教目標の実践を進めるため、「実践の手引き」などを作成して教区に配布した(10月)。教区司祭大会は「キリストの平和と現代社会をテーマに開かれたが(6月)、司教目標の推進をはかった司祭の勉強会だった。平和に対する関心は各地にも活発で、岩手カトリックセンターを中心にした一連の活動や、仙台元寺小路教会青年会の実践を生んだ。これらは

司教をはじめ教会関係者、幼稚園関係者および来賓多数が出席、落成式祝賀会を行った。同幼稚園は園児数二百六十五人と教区内でも最大級の規模を誇り、新園舎は鉄筋コンクリート二階建、保育室八つのほか、講堂兼遊戯室、園長室、職員室、教材室など延二二七・六二四平方メートルで屋上も運動場になっている。今回の改築は一関市の都市計画のため、園庭の削減や園舎の移動が必要になり、教会、幼稚園敷地の再整備のため改築にふみ切った。



教会の平和句間設定、核禁署名の運動と結んで、福音に照らした平和問題の認識を深めた。信仰生活、福音宣教といった教会独自の問題にも関心が寄せられた。これらは青森、宮城、福島での県信徒大会のテーマとして取り上げられた。教区各地でカトリック学校や幼稚園の新改築が多かったが、そのほかさまざまな教勢発展を示すものはなかった。小教区教会同士の交歓が目立ったが、これは教区一致を進める好ましい動きといえよう。

司教目標二年目は、教会内でのキリストの平和の実現。それとともに、信者が勉強や研修を通じて、信者としての意識向上をはかることに大きな期待が残された一年だった気がする。

本年4月着工、9月末に完成した。宮城県気仙沼教会(主任・土井勝吾神父)は11月3日午前11時から、同教会信徒および関係者、来賓など約百五十人が参列、佐藤千敬仙台司教によつて新しい幼稚園園舎、司祭館信徒館の祝別式を行い、ひきつづいて落成、祝賀会を催した。

今回の新築工事は気仙沼教会宣教百年記念事業として計画され、信徒ら一丸となって進めたもの。旧幼稚園園舎や旧司祭館の整理を伴ったもので、狭い教会敷地をフルに活用した多目的建物。鉄筋コンクリート三階建の一階は幼稚園保育室、二階は幼稚園ホールと司祭住居、三階は和室二間の信徒館で延六九一平方メートル。由緒ある聖堂とともに坂の上に新装成った白亜の幼稚園は、気仙沼の新名物になりそう。気仙沼カトリック幼稚園は今回の改築を機会に、学校法人として地域の幼児教育に活動することになる。

ヴァルデス神父様メキシコへ帰国

グアダルペ外国宣教会のアントニオ・ヴァルデス神父は一九五九年来日以來津若松をはじめ田島教会で23年間働いて来られたが、宣教会の異動で去る10月23日帰国した。新任地は米国のロスアンジェルス。同神父は田島教会と幼稚園の創設に尽力した。なおグアダルペ会には昨年春来日し、東京で日本語を勉強しているエンリケ・ゴメス神父(34歳)があり、一日も早く司牧生活に入るよう待たれている。

盛岡百合 郊外の新校舎へ

10月2日盛大に落成式



明治二十五年創立、九十年の歴史を誇る盛岡百合学園はこのほど盛岡市中央通から同市山岸地区に新築移転、さる10月2日、佐藤千敬仙台司教を迎えて新校舎の祝別と落成記念式典を挙行了した。

旧校舎所在の盛岡市中央通は市の中心部で周囲の交通量もふえ、校庭の手狭さや校舎の老朽化などから郊外移転がのぞまれていた。幸い市の北東の山岸地区に適地を得、55年6月地鎮祭、56年起工式と順調に工事が進み、本年8月に幼稚園、小学校、中学校、高等学校などすべての施設が完成した。

秋晴れのもと行われた落成記念式典には教会、学校関係者や来賓およそ四百人が参列。午前11時、生徒四十五人編成のオーケストラが奏でる前奏曲「プロメテウスの創造」で開会。オランダ製三つの鐘が鳴りひびくなかを佐藤司教が入場、新学園の祝別、生徒代表の献花、聖書朗読、司教講話で祝別式をおえた。引きつづき記念式典では、百合学園理事長戸刈美奈子修道女の式辞、盛岡百合学園高校校長立川健代修道女の挨拶、関係者への感謝状の贈呈があり、全校生徒による「ハレルヤ・コーラス」の大合唱で終了した。

新キャンパスは山間を利用した理想的な環境で、二万六千平方メートルの広大な土地に幼稚園、小学校、中学校、高等学校および寄宿舎や修道院が調和よく配置されている。

岩手県 カトリック青年のつどい

10月16、17の両日、盛岡の岩手カトリックセンターにおいて、岩手県カトリック青年の集いが開かれた。指導はベトレム会のパウマン神父とマルコ神父。一日目はテーマ「若い人、みんなで手をつなごう」に基づき三つの講話があり、その後話し合いがあった。

①今大切にしていることは ②自分との出会い、他人との出会い、神さまとの出会い ③コミュニケーション

二日目はミサの後、晴れ渡った秋空の下でソフトボールをしたり、近くの牧場を訪問し、うさぎや牛などと一緒に楽しく過ごした。

今年には仙台からの18人をはじめ、宮古から1人、久慈から3人、そして地元盛岡から10人程で30人以上の参加者だったが、岩手県内からより多く参加者があればとの声もあった。

仙台教区修道女連盟 院長研修会開催

▽ :



仙台教区院長研修会がさる11月8日から10日までの3日間、松島の仙松閣で開催された。テーマは、「共同体のアニメーターとしての祈りの生活」、講師はサレジオ会金子賢之介神父。講話は、道元、空也の思想を展開しながらアニメーターの生命は「祈り」であることを

磁石の働きを例に取り、絶えず神に立ち帰ろうとする心の必要を強調。第二バチカン公會議の精神に基づいた共同体の在り方に言及、修道生活に深い洞察を与えた。

会期中に行われた総会で新役員が次のように決まった。

会長||リーズ・ラミ(オタワ愛徳会)、副会長||工藤正子(善き牧者会)、会計||正木郁子(聖ヨゼフ会)、書記||栗原志づ江(女子パウロ会)

「いのちは神からの賜物」

本間たか子氏

仙台で講演



仙塩地区あけの星連合会婦人会は、「小さな生命を守る会」と「カトリック正義と平和と仙台協議会」の後援のもとに、10月31日(日)の午後、元寺小路教会信徒館でファミリーライフ協理理事・本間たか子氏の講演、「生命の尊厳とNFP」とマザー・テレサの映画「生命、それは愛」の上映があり、百人以上の人が参加した。

氏は物質文明の発展に反し精神性の衰退の目立つ日本において大量の胎児が闇にほうむられている事実をあげ、NFP(ナチュラルファミリー・プランニング)による家族計画を紹介、萩野式を土台にした基礎体温法、排卵法、触知法などを選択併用するよう指導、夫婦間の真の愛と理解と協力の下に幸福な家庭を築くことを強調した。

本間たか子氏は81歳の高齢にもかかわらず深い信仰に基づいたその勇氣と行動力で全国を講演しており参加者一同深い感銘を受けた。

クリスマスの頃になると思い出すこと。それはフィリピンの人達のことである。

クリスマスイヴの9日前からノヴェナ(9日間の祈り)が全教会で始まる。朝5時から5時半ごろになると、どの教会も子どもから老人に至るまで、人で一杯になる。人間の他に犬やにわとり、豚の親子まで雑居してにぎやかに入祭の歌がギターに合わせて歌われ、ミサが始まる。ミサ中、時を告げるにわたりの声が聖堂にけたたましく響くこともある。熱気にあふれたミサが終わる頃、東の空が明るくなる。ミサの後、家に帰る者、近くの軽食堂で朝食をとる者などいろいろだ。その後、人々は勤めや学校へと向かう。人々は9日間毎朝熱心にこの勤めに参加する。修道院では4時頃からミサが始

日本の神学生の現状を知ろう

一邦人司祭育成の日にあたりー
仙台教区には、現在83人の司祭がいる。その内日本人は32人、外国人が51人、そして神学生が3人いる。数から考えても邦人司祭が多くなる事が、いま仙台教区の最も緊急な課題であろう。東京カトリック神学院発行の神学院通信16号に「神学院の現状について」という記事があった。邦人司祭育成の日にあたり神学院で学ぶ神学生の現状を知り祈る事も理解の一つと言えよう。

東京カトリック神学院の現状 57年4月現在

神学生数	哲学科	19人	出身教区	札幌	3人
	神学科	27人		仙台	3人
	計	46人	新潟	1人	
受洗年齢	幼児	25人	浦和	2人	
	13歳～18歳	9人	東京	13人	
	20歳以後に受洗	12人	横浜	6人	
家族の宗教	全員カトリック	28人	大阪	7人	
	父以外全員カトリック	4人	京都	4人	
	カトリックと新教混在	1人	高松	2人	
	諸宗教	13人	広島	2人	
家族構成	本人長男	22人	那覇	1人	
	その内1人息子	9人	修道会	2人	
	次、三男、他	24人	合計	46人	

九州の神学生は長崎、福岡の神学院で養成。今回神学生のいない教区もある。

南の国のクリスマス

まる。そして24日のクリスマスイヴ、すべての教会は人で一杯になる。一回のミサでは間に合わず一晩中次から次へとミサを行う教会もある。こうして、幼きイエズスは金持ちにも貧しい人々にも平和の君としてお生まれになることを人々は確かに実感する。25日の朝は、とても静かだ。官公庁をはじめ、すべての商店街はシャッターをおろし、それぞれクリスマス休暇をゆつくり家庭で味わっているようである。
最近政治的に不穏といわれるフィリピン、あのスラムの人達は元気に今年もノヴェナにあずかっているだろうか。ポインセチアが真っ赤に色づくのも丁度この頃、静かなキリスト教国フィリピンのクリスマスが想われる今日この頃である。(仙台 A・O)



◎ 家庭のワークショップ (家族のつどい)のご案内
私達の家庭を、もう一度静かな目で見つめなおしてみませんか。
〃 仕事に疲れた夫、子供の教育に不安とあせりでいら立つ妻、勉強に追いまかれる子供達、すべての現実から置き去りになる老人達。〃 小学一年以上なら、だれでも参加出来るこのつどいに出席し、それぞれの心の中を話し合ってみませんか!

12月5日(日)AM11時～PM4時(ミサ有)
所 仙台・八木山カトリック教会
指導 ダナン神父(フランシスコ会士・マリッジエンカウンター指導者)
● 当日、託児・昼食準備あります。連絡先は、仙台市古城3-22-18-14 法務省APC-14小田島輝夫(Tel 85-2798)
◎ 第四回神学講座
テーマ「日本人の霊性とキリスト教」
ー そのⅢーゼロの視点から
講師 奥村一郎神父(カルメル会)
日時 12月18日出PM6時から8時
場所 仙台・元寺小路教会・信徒館
受講料 一般1千円 学生1五百円
主催 神学講座実行委員会(今回の講話は①日本人の祈り②キリストに捕えられた仏教徒、に続くしめくりとなるもの)

「小さな生命を守る会」
について

豊屋町教会 猪岡 近男

前号で会の名称の改名についてお知らせしましたが、もう少し詳しく説明させていただきます。夫、妻子特例法を考える会では昨年4月、「いと小さな生命が救われるために」「夫、妻子特例法とは何か」というパンフレットを作り、その必要性を訴え、この法の制度を促進するための署名運動を行なってきました。皆様のご協力で千六百余名の署名を得て、昨年十月宮城県議会にこの法の制定に関する請願書を提出しました。しかし請願は年度末が近づいても採択される見込みはないというので、今後に再請願の余地を残す方がよいとの紹介議員の勧めに従い、取り下げるといふ結果になりました。

会としては、その実現は未だ機が熟さずと判断し、原点に返って再出発すべきではないかと考え、会の名称を改めると共に次の三つの分野を設け、研究していくことにしました。

- ① 生みの親に祝福されないような生命の誕生を未然に防止することを願い「性」の問題を取りあげ認識を深めていく。
- ② 現に不幸にして生みの親に疎外されているえい児(胎児)がいる場合には、互いに支え合って適切な養い親を求めよう努める。
- ③ 時代にふさわしい養子制度が必要であることの共通理解を広め、特別養子法の制定を押し進めていく。

皆様のご理解とご支援を願ってやみません。

読者のへえじ

死者の月に思う

原町教会 相良 ヒロ子

十一月は死者の月でした。亡くなった方々のことを思うと同時に自分の死を見つめる。信仰する者にとつては熱心さをよびさまされる月です。この月を迎えると、よく思い出す私の体験をお話ししたいと思います。

私は出産のため三度帝王切開をしました。全身麻酔をうけ、意識の一部が初めてもどつた時のことです。「いつたい自分はどうしたのだろう。この苦しさは何だろう。きつと自分は何かのことで死の世界に向かっているのだろう」と思いました。そしてこの苦しみをもう少し我慢していたらイエスさまやマリアさまにおめにかかれるのだと思つて、平和な落ち着いた気持ちで待つていたのを思い出します。

いつかは誰にでも必ずおとずれる死。自分を取りまいていた全てのものとの決別。そんな孤独のなかで神様におめにかかれるのだという希望を持つてるといふことは何と幸福なのでしょう。信仰をないがしろにしていてる人を見ると、心からいたましく思うのです。私は時々、なぜ信仰の恵みをいただけたのだろうと思ひめぐらします。すると、「天地創造以前より、キリストによつて選ばれた者」という天の声が深き感動をもつてせまってきます。恵みのなかの無償の恵み、神様の奥義を直接個人的に教えていただいている信者の責任は何と大きいことでしょうか。幸せな死をむかえるために、今の時を大切にしたいと思つています。



最近、デコパージュをおぼえた。アイコンや写真を木の板にはりつけ、まるで木に絵を描いたように加工するのである。

知人のIさんが祈ることに関心を持ちはじめたと聞き、デコパージュしたアイコンを贈つた。間もなく、次のような便りをいただいた。「茶の間の片隅に祈る場所を作りました。座布団の前に聖書と聖母子の絵を置いただけです。：。ときどき正座し、聖書を読み、祈つています。以来、この家が今まで以上に大切に思えてきました。：。」

祈る場所と時を持つて、自分の家があります大切なものとなつた、という。共に住む家族、家を訪れる一人ひとりも大切になつたに違いない。

Nさんがはじめて教会に訪ねて来たのは日曜日のことだつた。バス、汽車を乗り継ぎ、やつとのおもいでたどり着いた。Nさんは84歳。Iさんの友人だという。

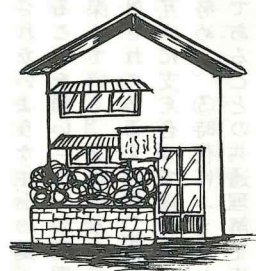
二人は洗礼を受けている訳ではないがキリストのかおりに触れて、心・足が教会へと向けられたのだろうか。

「家庭から社会にキリストの平和を」は今年の教区目標であつた。Iさんは祈ることを通して、知らず識らずの中にこれを実践されたようである。(狼河原)

おらが教会

(26)

青森・野辺地教会



野辺地町は、人口約二万、東北本線と大湊線の分岐点。ホタテ貝養殖の盛んな所。

一九五九(昭和三四)年、三沢教会の主任司祭ルデック神父が、青森と三沢の間であり、二家族の信者(近藤医院の先生と女医夫人及び藤野理容院の家族八名)の司牧をも考えて、現在地に伝道所を開設し、将来を展望しながら、巡回布教活動を開始した。

当時は、国道といえども舗装されておらず、巡回には汽車と徒歩に頼らざるを得なかった。ルデック神父の後任として一九六〇(昭和三五)年からデュメン神父が十和田教会から巡回された。現在の国道4号線は、春の雪解け期にはジープさえ走行不可能な隘路であったと聞かされている。当時の巡回のご苦労がしのばれる。

デュメン神父は宣教の手段として幼稚園設立の必要を認め、伝道所そのものを二教室の幼稚園として活用し、一九六四(昭和三九)年には念願の新園舎を建設、幼児教育は軌道に乗った。

ルデック神父及びデュメン神父の属するケベック外国宣教会は、大湊教会(一九六八〇昭和四三年移管)にひきつづき野辺地教会を、一九七一(昭和四六)年に邦人司祭団へ移管し、同時に巡回教会から小教区教会に格上げとなった。小教区教会になってからは、土井勝吾神父(一九七一〇昭和四六年)、梅津明生神父(一九七二〇昭和四七年)、一九七六〇昭和五一年)、高瀬和夫神父(一九七六〇昭和五一年四月着任)が着任している。

教会は、町の中心商店街に連なっており、人の集まる所として是最適な条件を備えているので、地域社会に受け入れられるための努力は開設以来の課題である。

隣りの洋装店さんは、「十字架をつけ、教会らしい建物にすれば、人はくるんじゃないですか」とアドバイスしてくれる。三角屋根に十字架がついている、というのが一般のイメージらしい。

建物については、普通の大きな民家の正面をモルタル仕立て、一応教会風に改装したものだ、その時十字架をつけるのを忘れたのだろうか。町の人には園長住宅としか見えないらしい。

内部は、小聖堂、集会室兼応接室があり、各種会合が十分できるようになっているが、今のところ信徒以外には、幼稚園父母の会が使用するに止まっている。

年間最大の活動はクリスマス。毎年一〇〇名位の幼児から大人までの「クリスマスの夕べ」の集いが行われる。

対外的活動としては、三年前公民館を借りて、「マザー・テレサ」の映画会を開いたことがあるが、その時初めて一般の人々を前にして、「マザー・テレサの手の美しさ」を語ったことを憶えている。

日曜学校では、卒園生を対象に、幼稚園時代の宗教教育の芽生えを育てることを目的として、月二回、楽しい集まりをもつように努力している。

指導者は三名であったが、内一名は今春函館にある男子トラピスト修道会に入会し、現在在期誓願の修道生活を送っている。

教理と聖書の勉強は、唯一人の求道者の勉強時間に、他の人も加わって行われている。

善し悪しは別として、当教会は、付属幼稚園の存在に支えられているといつてよい。従って信者ではない先生方の協力は貴重なものである。毎月最終土曜日に、先生達による感謝のミサが捧げられ、働きの源泉となっている。

信徒については、地元の人が少なく、他は勤務によつてこの町に住んでいる人達なので転入が多く、当教会に定着する人は少ない。家族単位の信徒で、永住する人があらわれるまで尙、歴史の経過を聖霊の御働きに待たねばならない。

(高瀬和夫神父記)

仙台司教区事務所だより第62号

昭和57年12月1日発行

発行所 仙台司教区事務所

〒980 仙台市本町一丁目2番12号

TEL 0222 22 7371